

## 第5章

### 地域協働型教育における学外施設の役割と課題

—福知山公立大学まちかどキャンパス吹風舎での実践から—

*The Roles and Challenges of Utilizing Off-Campus Facility  
in CBL(Community-Based-Learning) Education  
;The Case Study in the Practices of "Machikado Campus Fukuchisha"  
at The University of Fukuchiyama*

谷口 知弘

Tomohiro TANIGUCHI

#### 要旨

福知山公立大学（以下、本学）は、2018年5月13日に学外施設「福知山公立大学まちかどキャンパス吹風舎（以下、本学外施設）」を開設した。本章では、この本学外施設で実践された正課及び課外の地域協働型教育について論考する。特に、施設の特性を活かして活発に取り組みられた課外教育として学生企画チーム DOKKO の活動に注目してより詳しく記録し検討した。そして、本学の正課及び課外における地域協働型教育の充実を計るために本学外施設で展開する地域協働型課外教育のあり方や方向性を検討する基礎資料とすべく、学外施設の役割と課題について考察した。

キーワード：地域協働教育、学外施設、協働、課外教育

Keywords: CBL(Community-Based-Learning) education, *Off-Campus Facility*,  
*Co-production*, *Extracurricular education*

#### 1. はじめに

福知山公立大学（以下、本学）の学外施設「福知山公立大学まちかどキャンパス吹風舎（ふくちしゃ）（以下、本学外施設）」は、2018年5月13日に開設記念式典を挙行、開館から約9ヶ月が経過した。筆者は、2017年の春頃より、担当教員として施設の整備及び事業企画に関わり、2018年度からは施設の運営管理を所管するまちかどキャンパス専門委員会の委員長として企画運営に携わってき

た。今回、「平成 30 年度福知山公立大学研究活性化助成金」をもとに発足した地域協働型教育研究会のメンバーとなり、概ね 1 年間の準備期間と開設後 9 ヶ月の活動を記録し考察する機会を得た。

本稿では、本学外施設の概要を紹介した後、本学外施設を利用して実施された正課及び課外の地域協働型教育について概観し、施設の特性を活かして活発に取り組まれた課外教育について詳しく記録し検討する。そして、地域協働型の正課・課外教育を進める上での本学外施設の役割と課題を明らかにし、地域協働型教育の充実に向けて学外施設であるまちかどキャンパス吹風舎の今後の展開に資する基礎資料を提供することを目的とする。

## 2. まちかどキャンパス吹風舎の概要

### 2.1 開設の目的<sup>1</sup>

大学からまちに出て、「まちかど」に設けた本学外施設は、大学の教職員・学生と地域の人々が集い、交流する機会と場をつくる「いえ（舎）」であり、多様な人々が集い、話し合いや共同作業を通して学び合い、持続可能な地域社会形成の担い手となる人を育てる場を目指して設置された。

また、本学外施設を地域住民が集う「場」と見立てて、地域の公民館や集会所を活用して取り組まれる住民主体の事業モデルを提供することも目的としている。2018 年 5 月 13 日に開設記念式典を挙行、開館した（写真 1）。

### 2.2 機能・空間と事業・活動

本学外施設の機能と空間を使い（図 1）、初年度試行実施された事業を紹介する（表 1）。実験的な取り組みを重ねつつ関わる学生や地域住民の声を大切に、恐れず変化・進化する「場」であることを標榜している。利用者は本学学生や地域住民を中心に、開館 9 ヶ月で約 4,000 人であった。



写真1.開設記念式典での記念撮影。学生企画チームDOKKOのメンバー8名が参加。



図1. 目的・活動と機能・空間の関係についての概念図  
（図:筆者作成）

<sup>1</sup> 「福知山公立大学まちかどキャンパス吹風舎パンフレット,2017」及び「福知山公立大学まちかどキャンパス吹風舎 2018 年度活動報告書,2018」参照

表1 まちかどキャンパス吹風舎の機能・空間と2018年度(初年度)実施された事業・活動<sup>2</sup>

機能・空間	事業・活動
① Library (ライブラリー: 交流する図書室・読書室)	「まちライブラリー福々BOOKS@福知山公立大学」: 本をきっかけにつながりを生む、思いと本を持ち寄ってつくる小さな図書館を開設。
② Gallery (ギャラリー: 学ぶ・感じる展示と情報発信の場)	「まちかどギャラリー」: 地域で活躍する様々なジャンルのクリエイター、作家たちの仕事を紹介した。また、大学でのゼミ活動の成果の発表の場として活用された。
③ School (スクール: みんなで学び合う場)	福知山公立大学公開講座「井口学長塾」、「まちびとゼミ」及び「まちびと起業塾」が開催された。 「井口学長塾」は学長井口先生が塾長を務める近代史をテーマにした学びの場、参加者が運営に主体的に関わる学びのコミュニティが形成された。地域住民が講師となり、学びと交流の場をつくる「まちびとゼミ」、「福知山踊り」と「認知症」の二つのテーマで開催された。「まちびと起業塾(社会起業家の育成、ソーシャルビジネス立ち上げ支援)」は地域に暮らし地域で商う小さな高い起業塾、本年度は「まちの『スキマ』で小商い」をテーマに開講された。
④ Café (カフェ: 出会いと交流の場)	「想て成しかふえ」: 学生企画チーム DOKKO と地元商店街の協働で運営するコミュニティカフェ。地域住民と学生が交流する場づくりの試みが行われた。
⑤ Workshop (ワークショップ: 知恵を集めて企て実践する場)	「地域プロジェクト(学生企画チーム DOKKO が中心となり地域と協力して事業を実施)」 「ふく子屋プロジェクト」: 「学び」を大きなテーマに地域の小学生と大学生が交流する場づくり。学生と小学生が、互いに学び、成長する場をつくる。「福おじばプロジェクト」: 高齢者と学生が楽しく交流することを通して助け合うつながりをつくり、一緒に楽しく安心して暮らせる地域づくり。地域活動への参加や交流会を開催された。「大学ゼミ活動での活用」: ゼミ活動の演習室及びイベントやワークショップなど協働実践の社会実験の場として活用された。
⑥ 多様な市民活動を支援する場	市民活動など公益活動での利用。予約なく利用できる少人数のミーティングから大人数で貸し切ったワークショップやセミナーなど、様々な活動に活用された。

## 2.3 運営

運営は、まちかどキャンパス専門委員会と事務局、まちかどキャンパス吹風舎学生企画チーム DOKKO(ドッコ) (以下、学生企画チーム DOKKO) が連携・協力して行われている。

まちかどキャンパス専門委員会は、本学外施設の企画・運営について検討し実践する委員会として、本学市民学習・キャリア支援センターの下部組織として設置されている<sup>3</sup>。委員 3 名(教員)と事務

<sup>2</sup> 福知山公立大学まちかどキャンパス吹風舎 2018 年度活動報告書,p2,2019

<sup>3</sup> 市民学習・キャリア支援センター 構成メンバー,福知山公立大学北近畿地域連携センター/市民学習・キャリア支援センター公式サイト,<http://www.fukuchiyama.ac.jp/kitare/news/2018-04-20-148/> (2019 年 3 月 4 日参照)

局 3 名（職員）で構成し、事務局の内 1 名が本学外施設専属職員として勤務している。加えて、事業実施については、担当のコーディネーター（2 名）が配置されている。筆者はまちかどキャンパス専門委員会の委員長を務めている。

学生企画チーム DOKKO は、吹風舎のコンセプトに共感した学生が組織する学生チームである。本学外施設の活動を支える重要な役割を担っている。本稿ではこの学生企画チーム DOKKO の活動を「課外教育」として取り上げ論考する。昨年の 7 月、呼びかけに名乗りを挙げた 2 名から始まり、現在 23 名の学生が参画している。

### 3. まちかどキャンパス吹風舎における地域協働型教育

本学外施設を利用した正課及び課外の地域協働型教育について概観し、施設の特徴を活かして活発に取り組まれた課外教育として学生企画チーム DOKKO の活動について、立ち上げから現在に至る 1 年 8 ヶ月を記録し、学外施設を利用した地域協働型教育の役割と課題を検討する資料とする。

#### 3.1 正課教育における活用

正課では、地域経営学科の教員 3 名が計 10 演習科目で利用した（表 2）。本学外施設が構築しつつある近隣住民や団体とのネットワークの活用や月 1 回の福知山ワンダーマーケットの集客力を活用した活動など、本学外施設の利点を活用した実践がなされた(写真 2.3.4) 4。

表 2 演習科目での利用状況（2018 年度）

担当教員	演習科目名	内容
教員 A	地域経営演習 I・II（1 年生）	大江二俣和紙による灯籠づくりを地元のろうあ者の方々と実施。
	地域経営演習 III（2 年生）	地域の子どもや高齢者と、昔遊びをしながら交流の場を開催。
教員 B	地域経営演習 I・II（1 年生）	ワークショップや聞き取り調査等に利用
	地域経営演習 III（2 年生）	時間内での演習及び、地域住民や事業者の参画を得て開催したワークショップ「暮らしとまちを見直す井戸端会議」で利用。
	キャリア探求 I・II（3 年生）	新町商店街界隈をフィールドに活動。2 チーム 2 テーマでそれぞれワークショップを実施。
教員 C	キャリア探求 I・II（3 年生）	ゼミ活動を紹介する「ワンダーポスターセッション」を福知山ワンダーマーケット開催日に実施。

4 福知山公立大学まちかどキャンパス吹風舎 2018 年度活動報告書,pp26-31,2019



写真2. 地域経営演習Ⅲ(2年生)  
時間割内の演習



写真3. キャリア探求Ⅱ(3年生)  
住民とのワークショップ



写真4. キャリア探求Ⅱ(3年生)  
福知山ワンダーマーケット  
開催日に実施したワークシ  
ョップでのアート展示

### 3.2 課外教育における活用—学生企画チーム DOKKO の活動

学生企画チーム DOKKO の活動には、筆者が担当教員として、事業企画や実施のプロセスに伴走したことから、サークル等の課外「活動」とは異なり、課外「教育」として捉えた。本節では本学外施設の課外教育について、学生企画チーム DOKKO の活動を追って記録し、活動展開の意図や学生の意識の変化については主に学生企画チーム DOKKO 代表の2年生学生 T の聞き取り調査<sup>5</sup>を基に記述し考察した。

#### 3.2.1 学生企画チーム DOKKO の目的と活動方針

学生企画チーム DOKKO の目的と活動の方針について、「福知山公立大学まちかどキャンパス 2018 年度吹風舎活動報告書」<sup>6</sup>に学生企画チーム DOKKO 代表学生 T がまとめた文章が掲載されている。目的を2つ、活動は3つの方向性を設定している。まず目的の1つ目は学生と地域の協働を通して両者が成長すること。2つ目は、学生と地域の架け橋を創ることとしている。次に活動の方向性は、1つ目に学生が主体的に企画する「地域プロジェクト」の実施をあげ、2つ目に地域のイベントや行事など地域活動への参加、3つ目に学生と地域をつなぐ活動をあげている。本学外施設のコンセプト「大学の教職員・学生と地域の人々が集い、ひとを育てる。まちを育てる。」と重なり、加えて学生視点で自発的、積極的に行動しようとする意思が表れている。「福知山公立大学まちかどキャンパス吹風舎 2018 年度活動報告書」に記載された学生企画チーム DOKKO 代表である学生 T がまとめた文章にこの思いが表現されている。以下に引用する。

私たち DOKKO は、まちかどキャンパス吹風舎を拠点とする学生団体です。地域と共に挑戦、成長し、学生と地域の架け橋を創ることを目的に活動しています。活動の内容は大きく分けて3つに分かれます。

<sup>5</sup> 学生企画チーム DOKKO 代表学生 T への聞き取り調査：2019年3月1日と3月7日に計2回、まちかどキャンパス吹風舎にて聞き取り調査を行った。

<sup>6</sup> 福知山公立大学まちかどキャンパス吹風舎 2018 年度活動報告書,p20,2019

1 つめは、学生自らが感じた問題意識や興味、やりたいことなどを地域で具現化する「地域プロジェクト」です。この取り組みでは、学生の主体性を伸ばし、学生の持っている力や疑問を地域にぶつけます。

2 つめは、地域のイベントや地域で行われる様々な行事への参加です。運営側として関わる事もあれば、ボランティアとして関わる事、また参加者としてなど様々な関わり方をします。

3 つめは、他の学生と地域をつなぐ活動です。この活動では、大学生が福知山での生活がより楽しく、有意義になることを目指し、福知山の情報発信や地域活動の勧めなど街中へ出て行く仕組み作りです。

学生は、地域に入ることによって学校の講義や日常生活では得られない学びや気づきを得るだけでなく、地域の方々と繋がることで、価値観や情報、新しい繋がりなどを広げ自分を伸ばします。

地域にとっては、私たち学生の活動が笑顔を増やし元気をつくる素の一つになればと願っています。また、学生の若い力や考え方と触れ合うことで、自らが暮らす地域の未来を考える刺激になればと思います。

このように学生と地域が互いに刺激しあい、成長しあう。そして助けあい、笑いあう。そんな団体です。

### 3.2.2 学生企画チーム DOKKO の活動の経緯

学生企画チーム DOKKO の活動の経緯を記録し考察するにあたって、発足から活動の進展に沿って活動内容の特徴から次の4つの段階に分類した。1つ目の段階はメンバー募集から始まり事業企画のアイデアを展開した①立ち上げ期、2つ目の段階は施設整備に関わって設計を担当した京都工芸繊維大学の研究室とセルフビルドの共同作業を行った②施設整備期、3つ目の段階は開館後の地域プロジェクトの企画を練り試行を重ねた③活動試行期、そして、4つ目の段階として現在取り組まれている組織運営体制の充実を④組織充実期とした。活動の記録では、変化の契機となった出来事を中心に記録し、学生企画チーム DOKKO 代表の2年生学生 T の聞き取り調査から活動の展開の意図や学生の意識の変化を記述し考察した。聞き取り調査に依る箇所については太字・斜体としている。

#### ①立ち上げ期 (2017年6月～2018年3月)

##### 学生企画チーム立ち上げの提案

まちかどキャンパスの企画・運営の検討に関して、筆者も含めた教員3名が任を受け、2017年6月6日「第1回まちかどキャンパスに関する打ち合わせ」が行われた。この会議において、筆者より学生企画チームの立ち上げを提案、引き続き検討することとなった。

##### メンバー募集-1

7月28日、筆者が担当する「グローバル特別講義Ⅰ」（1年生を主に約90名が履修）において、本学外施設設置の目的・概要を紹介しメンバー募集を行った。講義終了後1年生の学生 T と学生 K

が名乗りをあげた。この2名は、現在主力メンバーとして参画し学生 T は代表を務めている。

**学生 T は参加を決意した理由として「大学生活が面白くなかった」、地域経営学部地域経営学科で学んでいるのに「地域が感じられなかった」とし、悶々としていた時に募集があり、事業名を聞き面白いと直感してたと語っている。加えて、入学後すぐに1週間ほど入院を余儀なくされたことでサークル活動など課外活動に関わるチャンスを逸していたことも理由に挙げた。**

このように、学生 T が正課での地域協働の物足りなさを感じていた時期に、本学外施設の開設と学生企画チームのメンバー募集が行われた。正課での不満足を課外の活動に求めたと考えられる。

#### まちかどキャンパス吹風舎設計に関わるワークショップへの参加

2017年9月24日「地域の魅力を高める『まちかどキャンパス』の使い方を話し合う井戸端会議」が開催された(写真5)。学生企画チームのメンバー2名が友人1名、筆者が1名に声をかけ4名の学生が参加した。新たに参加した2名の内1名が、これを契機にチームに加わった。

本学外施設の近隣自治会・商店街の役員と本学教職員、設計で協働する京都工芸繊維大学関係者ら約30名が集ったワークショップは、4人程度の小グループに分かれ膝詰めの話し合いがなされた。

**この場に参加した学生 T は、今までに経験のない地域との関わりとして、地域住民が囲むテーブルに学生一人が入っていったことが刺激的であり、地域住民の思っていることをしっかり聞けたことが良かったと感想を述べている。**

#### フィールドワークとミーティング

2018年1月21日、学生企画チームのキックオフとなるフィールドワークとミーティングを行った。本学外施設の設置される新町商店街及び隣接する広小路商店街を中心にフィールドワークを行った後、広小路商店街のカフェを会場にフィールドワークのまとめと活動のアイデア出しをした。参加者は学生3名と筆者の計4名であった(写真6)。参加した学生 T はフィールドワークの印象を「知らないことが多かった。面白かった。」「モジカ、柳町、まいまい堂をちゃんと紹介してもらうことで魅力をあらためて感じた。」「感動した。」と語る。

学生 T は、このフィールドワークでの気づきと感動を本学の他の学生にも体験して欲しいと願い、この後の活動に取り組んでいった。



写真5. 「地域の魅力を高める『まちかどキャンパス』の使い方を話し合う井戸端会議」に参加する学生



写真6. フィールドワークを終え、カフェ(モジカ)で調査のまとめとアイデアを出し合う

この後、2週間に1回程度のミーティングを重ね企画を練っていった。2月中には概ね企画の柱が出揃った。

学生企画チームのメンバー募集-2

2018年2月2日、筆者が担当する「グローバル特別講義Ⅱ」（1年生を主に約90名が履修）において、再度本学外施設の概要説明とメンバー募集を行った。また、メンバーに加わった学生が友人を誘うかたちで徐々にメンバーが増え3月末には約10名となった（写真7）。



写真7. 講義の冒頭でメンバー募集をする初期メンバーのTとK

②施設整備期：京都工芸繊維大学との協働（2018年4月～5月13日）

『みんなで作る』セルフビルドのプログラムとして、4月に計3回、京都工芸繊維大学阪田ゼミと学生企画チームDOKKOの共同作業の機会を設けた。

京都工芸繊維大学阪田ゼミとの共同作業-1

2018年4月2日、施設設計を担当した阪田ゼミの教員と学生2名に学生企画チームDOKKOのメンバー3名が加わり共同作業の打ち合わせと試験的な仕上げ作業を行った。



写真8. 京都工芸繊維大学の学生と学生企画チームでセルフビルドの共同作業で行う

京都工芸繊維大学阪田ゼミとの共同作業-2

2018年4月16日～18日、学生4名が2泊3日で福知山に滞在、学生企画チームDOKKOのメンバーとセルフビルドの作業を行った（写真8）。4月17日には、学生企画チームDOKKO主催の交流会を開催、手作りのカレーライスでもてなし他大学との初めての交流を楽しんだ。



写真9. 「みんなで作る」ワークショップ、「漆喰塗り大会」で指導をする京都工芸繊維大学の学生

京都工芸繊維大学阪田ゼミとの共同作業-3

2018年4月22日～25日、学生5名が3泊4日で福知山に滞在、学生企画チームDOKKOのメンバーとセルフビルドの作業を行った。福知山ワンダーマーケット開催日の4月22日には『みんなで作る』ワークショップを開催。セルフビルドのワークショップ「漆喰塗り大会」（写真9）と活用のアイデアを出すワークショップ「三人寄れば文殊の



知恵」を実施した。

学生 T は、この一連の共同作業を振り返り、初めての他大学生との出会いは新鮮であり、セルフビルドと言う普段では経験することのない作業や聞かない情報が飛び交い、改めて協働、協力の必要性和そこから生まれるものの面白さを感じた、と述べている。

#### 開設記念式典

2018年5月13日、開設記念式典開催。学生企画チーム DOKKO はスタッフとして参加、準備や片付け、式典内では司会を務め(写真 10)、チームの紹介と一人ひとりが意気込みを語った。



写真 10. 開設記念式典で司会を務める学生企画チーム DOKKO のメンバー

### ③活動試行期：地域プロジェクトの試行実施

(2018年5月21～10月)

#### 定例ミーティングの実施

本学外施設開館から間もなくして、毎週木曜日に定例のミーティング(写真 11)を開催することが決定され、交流を通じたチームビルディングと地域プロジェクト(テーマ型プロジェクト)の企画立案を進めていった。



写真 11. 定例ミーティングの様子、ホワイトボードを利用した話し合いの視覚化の工夫

#### ミーティングのファシリテーションに関する講座の開催(学生企画チーム DOKKO の学びの場)

2018年6月15日、ジブン発掘本屋・ツルハシブックス代表でファシリテーションの専門家でもある西田卓司氏を招聘し「ミーティングに来たくなるミーティングにする」をテーマに講座を開催した。**以前からミーティングの重要性に気づき、3月に開催された本学市民学習・キャリア支援センター主催のファシリテーション講座に参加した学生 T は、その学びを活かしてファシリテーションを行っていたが、メンバーにその趣旨が十分伝わらず苦労していた。**そんな時期に、偶然ではあるが専属職員 of 懇意にするファシリテーションに造詣の深い専門家が新潟から出張で京阪神に来ることになり学生に紹介したところ強い関心と意欲を示しことで講座開講となった。結果、多数のメンバーでミーティングやファシリテーションについて学ぶ機会となった。**この講座を受けることで、その後のミーティングは充実したものになっていったと学生 T は振り返る。単に手法としてのファシリテーションではなく、その意味や価値をメンバー全員が共に体験を通して理解できたことが良かったと語る。**必要に応じた学びの提供は重要である。

「想て成しかふえプロジェクト」第1回開催：2018年6月14日

「ドッコイセプロジェクト」福知山ドッコイセまつりに初参加：2018年8月14日

福知山ドッコイセまつりには、8月14日と8月24日の二日に渡り踊り連を組んで参加した。プラカードコンテストでは広小路商店街理事長賞を受賞した(写真12)。

暑かった夏を振り返って学生 T は、福知山 2 年目で初めて参加した自身に重ねながら、福知山にはたくさんの魅力があるのに多くの学生は知らない、アクセスしていないことを残念に思ったと言い、今の学生の生活範囲の狭さを問題だと感じ、そして、自身も福知山についてもっと知りたいと思った。と語る。この気づきは、現在広報部で企画中の福知山の魅力を紹介するフリーペーパーの発行へと繋がっていく。

「LINKtopos 2018 in 静岡」参加

2018年10月6日～8日、静岡県で開催されたLINKtopos 2018 in 静岡(公立大学学生ネットワーク全国大会)に本学を代表して学生企画チーム DOKKO(10名)が参加した。全国から過去最高の41公立大学、163名の学生と約20名の教職員が集い、団体の活動紹介や課題解決のワークショップを行った(写真13)。この参加を振り返って学生 T は、他大学の学生たちが思いの外活動していることに驚き、この交流をきっかけに地域と関わって活動する大学間の交流活動の重要性に気づいたと語る。

これを契機に学生 T は、学外のセミナーや交流の場へ貪欲に参加するようになった。この学びから、運営体制に「渉外」や「営業」を設け、チーム全体として他大学との交流や幅広い学びの機会を持つ仕組みの構築に取り組む。

「ふく子屋プロジェクト」第1回開催：2018年9月29日

「福おじばプロジェクト」第1回開催：2018年10月31日

④組織充実期：運営体制の確立(2018年11月～現在)

運営体制が整う

2019年12月20日の定例ミーティングにおいて、組織及び担当メンバーが決まり運営体制が整う。まずは具体的な活動としての地域プロジェクトを優先し、次の段階として組織の充実に取り組んだ。

学生 T は、「渉外部」「広報部」「会計部」「営業部」と組織の運営に関わる部門を設けてメンバー全



写真 12. 福知山ドッコイセまつりに初参加。プラカードコンテストで入賞表彰を受ける代表 T



写真 13. LINKtopos 2018 in 静岡に 10 名参加。他大学の学生とグループをつくり課題に取り組む

員が役割を担う形ができたことで、地域プロジェクトでは強い関心を持つての参加が難しかったメンバーも新たにモチベーションを持って活動に取り組めるようになったと分析する。

### 3.2.3 学生企画チーム DOKKO の活動

本学外施設のコネクトに共感した学生が組織する学生企画チーム DOKKO の目的と活動方針を確認すると、目的は大きく2つ、①学生と地域の協働を通して両者が成長すること。②学生と地域の架け橋を創ること、と設定している。活動方針は、①地域プロジェクト(テーマ型プロジェクト)の実施と、②地域活動への参加、③学生と地域をつなぐ活動、の3つを挙げている。この目的と活動方針は、試行錯誤を重ねる中で活動後半に整理された。

初年度の活動として、主に「①地域プロジェクト(テーマ型プロジェクト)」の実施と「②地域活動への参加」が行われた。「学生と地域をつなぐ活動」については、チームメンバーと地域との交流にとどまり、チームメンバー外の学生の参加までには至らなかったが、地域プロジェクトの試行実施が「学生と地域をつなぐ活動」のプロトタイピングと捉えることができ、コンテンツは整いつつある。加えて、チームメンバーの能力向上を主な目的に学びや交流の場づくりや参加が行われた。

これら活動の全体像は次の「表3」で概観し、「①地域プロジェクト(テーマ型プロジェクト)」については、各事業の概要を紹介する。

地域プロジェクトは、本学外施設開館前の「立ち上げ期」から、フィールドワークやワークショップを行いアイデア展開から企画立案へと進めていった。この段階での事業案と実施案では多少異なり、メンバーの問題意識や興味に端を発したテーマが残り実践された。また、プロジェクト主要メンバーのテーマへの関心の高さや思い入れの強さが作用したと見て取れる。この点において、実施されたプロジェクトは正課では常套な調査を通しての地域社会の問題発見・設定からは始まっていない。だが、実施された活動を見ると個人の思いと社会の問題状況の重なりを生み出していることに気づく。筆者が担当教員として PBL(Problem Based Learning)を意識してアドバイスをを行ったこともあるが、2年生主導で運営していることから1年生での正課「地域経営演習Ⅰ・Ⅱ」での経験が実施の企画・実践で活かされていると推察する。

2018年度に実施した5つの地域プロジェクト(「地域プロジェクト」の名称は学生が名付けた)を紹介する<sup>7</sup>。

<sup>7</sup> 福知山公立大学まちかどキャンパス吹風舎 2018年度活動報告書,pp20-25,2019

表3 学生企画チーム DOKKO の活動 (2018 年度)

活動の枠組み	実施・参加した活動
地域プロジェクト	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドッコイセプロジェクト</li> <li>・想て成しかふえプロジェクト</li> <li>・ふく子屋プロジェクト</li> <li>・福おじばプロジェクト</li> <li>・畑プロジェクト</li> </ul>
地域活動への参加	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「福知山ワンダーマーケット」ボランティア (毎月第4日曜日)</li> <li>・「新町商店街夜店」ボランティア (有償) (2018.07.14)</li> <li>・「福知山ドッコイセまつり」踊り連で参加 (2018.08.16)</li> <li>・「福知山ドッコイセまつり」プラカードコンテスト参加 (2018.08.24)</li> <li>・「サタデーナイト福知山」ボランティア (2018.09.01)</li> <li>・「惇明公民館まつり」ボランティア (2018.10.14)</li> <li>・「大京都 2018 in 福知山」ボランティア (2018.10.20)</li> <li>・「RUN 伴 2018 京都 福知山」参加 (2018.10.21)</li> <li>・「大京都 2018 in 福知山」ボランティア (2018.11.02-04)</li> <li>・福知山公立大学学園祭「福桔祭」福知山踊り参加 (2018.12.01) *大学行事</li> </ul>
学びと交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ABD 読書会@京都」参加 (2018.05.07)</li> <li>・市役所視察及びワークショップ (2018.06.03) *DOKKO 自主企画</li> <li>・「大京都 2018 in 福知山」キックオフミーティングへの参加 (2018.06.03)</li> <li>・「ミーティングに来たくなるミーティングにする」講師：西田卓司 (2018.06.16) *吹風舎・DOKKO 共同企画</li> <li>・ワークショップ「シラベル」講師：チームシラベル田畑昇悟 (2018.06.28) *吹風舎・DOKKO 共同企画</li> <li>・「若杯者プロジェクト」調査、小浜市 (2018.06.30)</li> <li>・「スモールビジネス女性起業塾、講師：藤本智士」参加 (2018.07.01)</li> <li>・福知山公立大学まちびとゼミ「福知山踊りと福知山ドッコイセ祭りの歴史と魅力」参加 (2018.07.15)</li> <li>・福知山公立大学まちびとゼミ「習おう！踊ろう！福知山ドッコイセまつり踊り講習会」参加 (2018.08.09)</li> <li>・「ふくちやま次世代交流ワークショップ」参加 (2018.09.07-18)</li> <li>・福知山公立大学まちかどキャンパス吹風舎「まちライブラリー第2回講演会」参加 (2018.09.20)</li> <li>・「LINKtopos2018 in 静岡(平成30年度全国公立大学学生大会)」参加(2018.10.06-08)</li> <li>・福知山公立大学まちびとゼミ「学ぼう！やってみよう！『認知症×地域社会』～認知症の人と伴に走る全国リレー「RUN 伴」が福知山にやってきました」参加 (2018.10.17)</li> <li>・「2030SDGs カードゲーム体験会」参加 (2018.12.02)</li> <li>・神戸大学 KooBee との交流会 (2019.02.10) *DOKKO 自主企画</li> <li>・「府庁でしようぜ！！学生団体井戸端会議！」参加 (2019.02.10)</li> </ul>

### ①ドッコイセプロジェクト

- ・コンセプト：大学生が福知山ドッコイセまつりを楽しみ、感じる
- ・活動概要：福知山踊りの習得（写真 14）、福知山ドッコイセ祭りへの参加、プラカードコンテストへの参加
- ・参加メンバー：1年生 10名、1年生 1名
- ・地域協働のキーパーソン：商店街役員 A／商店街役員 B



写真 14.ドッコイセプロジェクト:商店街の役員より福知山踊りを学ぶ

### ②想て成しかふえプロジェクト

- ・コンセプト：ご近所と学生が繋がる場所
- ・活動概要：新町商店街と協働（写真 15）、まちかどキャンパス吹風舎近隣の住民と学生の交流を目的として、隔週木曜日午前 9 時から午前 12 時までカフェを実施。
- ・活動メンバー：2年生 3名
- ・地域協働のキーパーソン：商店街役員 A



写真 15.想て成しかふえプロジェクト:協働する商店街の役員よりコーヒーの淹れなどアドバイスを受ける

### ③ふく子屋プロジェクト

- ・コンセプト：大学生と小学生が交流し、学び、成長する活動
- ・活動概要：隔週水曜日の 16 時から 17 時 30 分、まちかどキャンパス吹風舎で実施。小学生の自主学習の支援とレクリエーション（写真 16）。公民館まつりへの参加など地域の小学生が関連した行事の手伝い
- ・活動メンバー：2年生 3名、1年生 1名
- ・地域協働のキーパーソン：事務局職員 C



写真 16. ふく子屋プロジェクト:小学生の自主学習を支援する学生

### ④福おじばプロジェクト

- ・コンセプト：福知山を大学生の第二の故郷にする！
- ・活動概要：近所の高齢者との交流会開催（芋パーティー、食事会）。自治会ラジオ体操部への参加、ラジオ体操部のクリスマス会やお誕生会に参加（写真 17）。
- ・活動メンバー：2年生 2名、1年生 3名
- ・地域協働のキーパーソン：自治会役員 D／商店街役員 A



写真 17. 福おじばプロジェクト:ラジオ体操部のクリスマス会に参加

### ⑤畑プロジェクト

- ・コンセプト：「野菜」と「人のつながり」を育てる
- ・活動概要：二週に一回、農作業や料理イベントなど。こ

の冬に遊休農地を住民から借り、耕作を始めた。

- ・活動メンバー：2年生7名、1年生1名
- ・地域協働のキーパーソン：なし

### 3.2.4 学生企画チーム DOKKO の運営体制

学生企画チーム DOKKO 代表の学生 T は7月頃から運営体制の構想を練り、地域プロジェクトが概ね活動を開始した頃合いを見計らい11月頃から、運営体制の充実に取り組かった。

運営体制

- ・代表、副代表
- ・渉外：他大学との交流、本学の学生と地域や外に出る活動
- ・広報部：学生と地域を結ぶ情報発信

ホームページ、フリーペーパー、SNS (Facebook、Instagram、Twitter)

- ・会計部：大学の予算、調達した資金の管理
- ・営業部：活動資金の調達に関わる営業活

この運営体制で最も興味深いのは「営業」部門である。学生 T はその目的を、メンバーの小さな気づきを実践につなげるため、新たな活動が金銭面で頓挫しないように自前の資金を持っていたいと語る。加えて、アルバイトではなくお金を稼ぐことは難しく、あえて取り組むことは面白く、経営の経験にもなる、と。この取り組みに至った背景には、半年間の活動を通して経験した大学予算抛出の煩雑な事務作業の回避や予算が無くなる可能性を見越してのことだと言う。加えて、サークルとは異なり、持続可能な組織運営の構築がより重要だと考えての取り組みである。

## 4. おわりに—地域協働型教育推進における学外施設の役割と課題

本稿では、上述した開設準備の約1年と開設後約9ヶ月の実践記録から、短期間の過程ではあるが現時点で見いだされた本学外施設が果たした役割と今後取り組むべき課題について検討する。

### 4.1 学外施設の役割

地域協働型教育の実践において、本学外施設が果たした役割として、次の3点を見出した。

#### ①大学・学生と地域をつなぐコーディネート機能

正課教育における聞き取り調査やワークショップ等の実験的実践、課外教育でのプロジェクトなどにおいて地域の協力者確保が比較的容易に行われ、大学・学生と地域双方が高く評価する実践となった。このような結果が得られたのには、本学外施設が構築しつつある専属職員や担当教員(筆者)を核とした地域のキーパーソンとのネットワークを活かしてコーディネート機能を担えたことにあると考える。

地域との協力・連携や協働を行うための信頼関係を築くことは容易ではないことは周知のことで

ある<sup>8</sup>。そこで、商店街内の空き店舗をリノベーションした本学外施設では、その立地特性を活かすべく、開設準備段階からワークショップを行うなど近隣の自治会・商店街との交流を進め、開設後は専属職員と担当教員を配して日常的に顔の見える関係形成に努めた。結果、大学・学生と地域の双方に楽しみや喜び、学びを生み出す協力関係をつくることができた。立地と人材の配置が揃うことで実現できたと考える。

## ②地域協働型教育の実験室

「3.2.3」で述べた学生企画チーム DOKKO の活動（表 3）の内「学びと交流」の活動に、教員が関わる狭義の教育の枠を超え、想定外とも捉えられる高い教育効果をもたらす実践を見ることができ。この実践から「地域協働型教育の実験室」としての役割を検討する。

「学び」については、学生企画チームの結成を検討していた段階から学生向けの研修プログラムの提供は提案されていたが具体的な企画には至っていなかった。また、「交流」についてはほぼ計画にはなかった。そんな中、実践された「学びと交流」の活動の多くは学生の主体性と行動力によって実現された。一例として、開設 1 カ月の 6 月 16 日に学外から講師を招聘して開講された講座「ミーティングに来たくなるミーティングにする」を見る。この講座は学生企画チーム DOKKO が活動を進める上で感じていた問題点を解決するための学びの場として設けられた。結果、主体的な学びの姿勢からその問題は概ね解決し、学生の意識を高め技術を習得することにつながった。学生のニーズと学びのプログラムが重なった時に高い教育効果をもたらされることを実感した。また、自らが足を運び、時には参加費等を拠出して出向く活動もみられた。これらの実践から、正課に比して学生が高いモチベーションと主体性を持って取り組む課外の活動に、地域協働型教育のあり方や具体的なプログラムを作成・改善するヒントがあることに気づいた。学外施設を拠点に実践されているが故にそのプロセスや効果を把握しやすい点も重要である。故に「実験室」としての役割を担うと考える。

## ③学生と地域を日常的につなぐ場

本学学生は、日常の暮らしの中で地域社会とどのように関わっているのだろうか。学生に話を聞くと、下宿と大学、アルバイト先の 3 カ所が主たる身を置く場となっていると言う。日々の暮らしにおいて地域社会に触れる機会は決して多くない。

ここで、本学外施設を見ると、開設 9 カ月で延べ 4,000 人が出入りする施設となっており、利用者は 0 歳児から 90 代の高齢者まで年齢の幅も広く、日常的に子どもが遊んでいたり高齢者が集っていたりする風景が展開している。加えて、地域住民から企業、行政、大学と多様な職業の人々が集う施設となっている。この場に身を置くことは同時に日常において多世代や多分野の人々と出会う機会を得ることにもなり、地域社会と日常的に関わる体験をすることにもなる。現在、日常的に出入りする学生企画チーム DOKKO のメンバーは多様な関係の中に身を置き、子どもと遊び高齢

<sup>8</sup> 藤本稯彦,田中恭子,橋本文子,大学と地域をつなぐコーディネート機能の構築—「島根県立大学地域コーディネーター」配置の社会実験を手がかりとして—『総合政策論叢』第 21 号島根県立大学,総合政策学会,p122,2011

者と話し専門家に相談するなど様々な交流と学びの機会を得ている。

このような、本学外施設での体験は、地域協働型教育において修得させたい学習成果である「態度・姿勢 (Attitude)」を身につける場となっている。

## 4.2 学外施設の課題

地域協働型教育に資する本学外施設が今後取り組むべき挑戦的課題として3つを提示する。

### ①大学・学生と地域をつなぐ拠点施設へ

学生企画チーム DOKKO が3つの活動方針の1つにあげる「学生と地域をつなぐ活動」として試行実施が始まったプロジェクトを見ると、本学外施設を常にも実践の場としているプロジェクトは5つの内2つであり、他の活動は本学外施設をミーティングや作業の場として利用するものの実践の場は外に求めている。この動きに学び、本学外施設の直接的な利用による地域協働型教育や活動の推進に視野を狭めず、地域のキーパーソンのネットワークの充実やコーディネーターの育成など、先に役割として見出したコーディネート機能の強化により、大学・学生と地域の協力や連携を支える拠点施設としてのあり方の検討が重要であると考ええる。

加えて、正課における協働実践の社会実験の場としての有用性を見出す。今年度の正課での利用は3教員 10科目と本学の全学年の演習科目全体(2018年度、81科目)から見るとごく一部の教員・科目の利用にとどまっている。前述したように、魅力的な機能を有しているにもかかわらず、教員や学生の利用者が一部に限られた要因として本学キャンパスからの移動時間(徒歩約30分、自転車約15分)がある。この移動時間からして時間割内での利用は難しいことがわかる。一方、今年度の利用実績のほとんどが協働実践における社会実験としてのイベントやワークショップの会場として、利用している。また、それらの活動では本学外施設の有する地域とのネットワークが有効に活用されていた。このことから、正課においては、時間割内での恒常的な利用よりも本学外施設が有する大学・学生と地域をつなぐコーディネート機能を活用したイベント的な実験場としての利用に正課における地域協働型教育での活用の可能性と有用性を見出す。

### ②課外教育による正課教育の補完、あるいは相乗効果の生成

学生企画チーム DOKKO 代表の学生 T への聞き取りから、正課の地域協働型教育に物足りなさを感じる学生は少なからずいると推察する。このような学生が、入学時の高いモチベーションと期待を維持して修学できる環境を考えた時、正課の充実に加えて課外教育・活動の充実による正課の補完、あるいは相乗効果を生み出す可能性を学生企画チーム DOKKO の活動は示したと考える。

ここで、本学全体の正課・課外の地域協働型教育プログラムを考えると、開学時から課外教育プログラムとして、教員と資金の支援を受けられる「地域との協働を核に、本学での学びを発展的に展開するような取り組みや地域における活動、地域住民・行政機関等との協働で展開できる取り組み等により成果が見込まれるものを採択」<sup>9</sup>する「学生プロジェクト」が展開されてきた。このプロ

<sup>9</sup> 地域協働型実践教育 2017年度成果報告書,福知山公立大学,p63,2018.03.



グラムは4年目の2019年度には単位化され、正課と課外の中間的な位置付けとなる。正課に加えて正課と課外の中間的なプログラムとしての学生プロジェクト、そして、課外教育の場と機会を提供する拠点として本学外施設での活動と、正課を補完する選択肢は多様性を増すことになり、課外教育を提供する場としての本学外施設の役割も大きくなる。正課を補完、あるいは相乗効果を生む課外教育の取り組みのチャンネルは、様々な学生の個性やニーズを活かす上では多様である方が望ましく、学生企画チーム DOKKO の取り組みに加えて、全学の取り組みの中で本学外施設の特徴を活かした地域協働型課外教育の新展開の検討も課題としてあげられる。

### ③大学・学生と地域内外をネットワークするハブへ

学生企画チーム DOKKO は、狭義な教育の枠を超えて、主体的に行動し「学びと交流」の実践を展開したことは「4.1-②」で先述した。この活動に注目するのは本学の立地特性の捉え方に新たな視点を提供している点にある。本学は「北近畿唯一の4年制大学」であることを強みとして地域協働を推進している。しかし、学生の視点に立つと北近畿に4年制大学が本学のみであることは、他大学の学生との関わりや多様な学び、交流の場への接近が教育においても生活においても極端に限定されると言う弱みとなる。この弱みを克服すべく主体的に行動し外部とのネットワーク形成やより多様な学びや交流の場への参加を実践する学生企画チーム DOKKO の姿から学ぶことは多い。開設当初の構想にはなかった外へと広がるネットワーク形成の必要性を示唆してくれた。

今後は、学生が地域協働型課外教育の実践の中で気づき、切り開きつつある取り組みをより積極的に支援するとともに、本学外施設の重要な機能として位置付けたい。

また、この機能の実現にあたって、他大学や他地域から関係者を招く場として、アーケードが美しいレトロ商店街にあるモダンな本学外施設のデザインや立地する新町商店街、広小路商店街境界の賑わいの歴史文化を蓄積してきた風土、そして、福知山ワンダーマーケットや京都府のアーティスト・イン・レジデンス事業など先進的な活動は強い味方になると考える。

このような本学外施設の有する魅力的な施設及び立地の特性をより活かすとともに、関わる学生が有する主体性と行動力を信じ、そしてその成果に学びつつ、大学・学生と地域内外をネットワークするハブとしての機能充実に挑戦的課題として捉え取り組みたい。